

第五回

ふるさと創生

魚の切り身が泳いでいると思ってしまう子どもはびさいにはないでかい。海あふれるこの境港の風土が子どもたちを育てているからです。こも境港の子どもたちに体験活動が不足しているという批判



五感を使えば使うほど、体験の入力は大きく深くなり、それによって表現の出力は多様で豊かになってゆきます。

② スーパーなどの消費地ではなく生産地に近づいて子どもの体験をやる

今の消費文明の中で子どもが健全に育つか疑問です。消費文明の問題点は、第一、一回の園長通信でのべたとおぼえます。

③ 環境について地域に責任をもちたい

「故郷喪失性」は現代人の運命だと哲学者は指摘しています。出生した場所だからって、ただちに故郷になるわけではないではありません。

土地のものに親しくしたい。子どもたちにとって境港がふるさとになっていく。年長けて、一日県外に出ても、心身に根を張るふるさとの方が、再び境港に帰らしめる。それが長い目で見て、少子化や過疎化への対策になると思われたい。

幼少の頃のちむらから「JUN」に土地の風物をつっから刻み付けたい。

思い出に残らなくとも、体験として蓄積されたことはあります。その蓄積がその人なのです。その人の歴史なのです。

④ どこから来てどこへ行くのか

ここにちの社会では、ものが、今ここで使いつけられる商品としての姿をうかがいます。そんな浪費社会で見失われたい。あるものが厚みを持つてくるようにです。

来し方行く末の奥行きを、魚に見る。よびがびきのうになれば、私たち自身の来し方行く末も問われてきて、「今をえよければいい」という薄っぺらな発想が破られ、人間が歴史的存在であるという事実がたちのほつてくる。そうしたら人はもう少しまじめな社会を作れるように思っています。

故赤塚不二夫は漫画を見て漫画を描いている今の漫画家を批判したことは、第三回園長通信で述べました。人間の作り物（人間の意図の内部にあるもの）を原点とするのではなく、人間が作っていないもの（人間の意図を越えたもの）を原点にしたとき、かぎらない創造性がわき出るといっています。だから、幼児教育では教科書で学ぶのではなく、体験で学ぶのです。

子どもたちは図鑑を見ていろんな魚を知っています。それも大切だ。図鑑で魚の名前を覚えることも間違いを見分けるセンスを養う。その知識が現実とマッチングするときに、ほんとの生きた知識になります。

本物を見聞きするときに、それが体験というものです。

